

研究主題

「自ら進んで考え表現しようとする児童の育成～音や音楽の活用を通して～」

八王子市立中野北小学校

主任教諭 水野 豊

第1 主題設定の理由

本主題は図画工作科の表現活動において、音や音楽を活用することで児童の興味・関心を高め、主体的・対話的で深い学びに寄与するかを検証するものである。

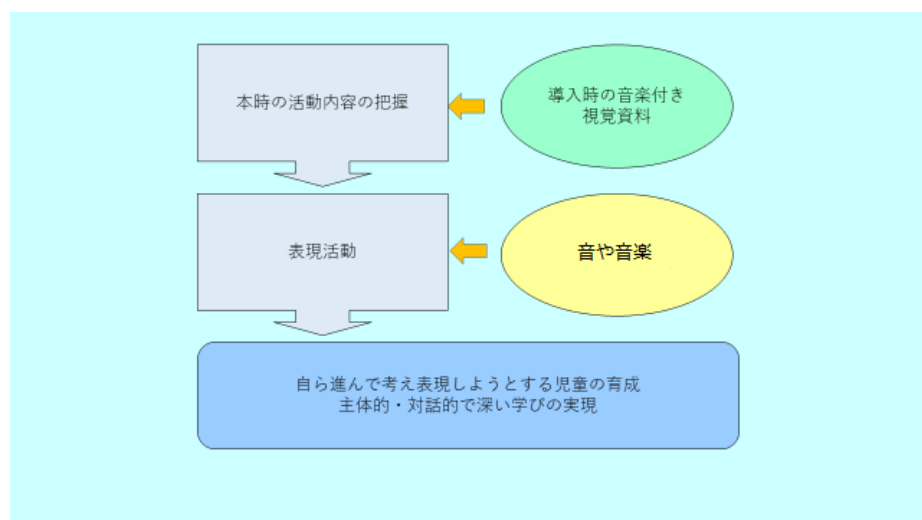
私たち教員は児童にとって充実した授業になるよう日々模索しているが、図画工作科の表現活動で停滞してしまう場面はいくつもある。例えば、児童が何を表現すればいいか把握できておらず困る場面や何をつくろうかなかなか決められず悩む場面などである。私自身も少しでも停滞を減らしたいと試行錯誤を行っているが、やはり納得できる結果を出すことは難しい。そんな日々の中で気になることがあった。

第3学年で海の中のようなすをイメージして描くという授業を行った際に導入時に映像資料を使用した。資料にはサンゴや熱帯魚など海の中のようなすを撮影した水中カメラの映像に添えてピアノの音楽が流れていた。初めて使用した際、児童は中休み時間の後で高揚が冷めやらないようすだったが、映像を流した途端に静まり映像を注視していた。映像資料を提示した後の活動も予想していた以上に意欲的で児童たち同士の表現活動にかかわる交流もいつも以上に活発にみられ、そのようすは授業者である私も驚くほどだった。次の年からも同じ題材を行う際に使用しているが、おおむね同じような効果が見られた。

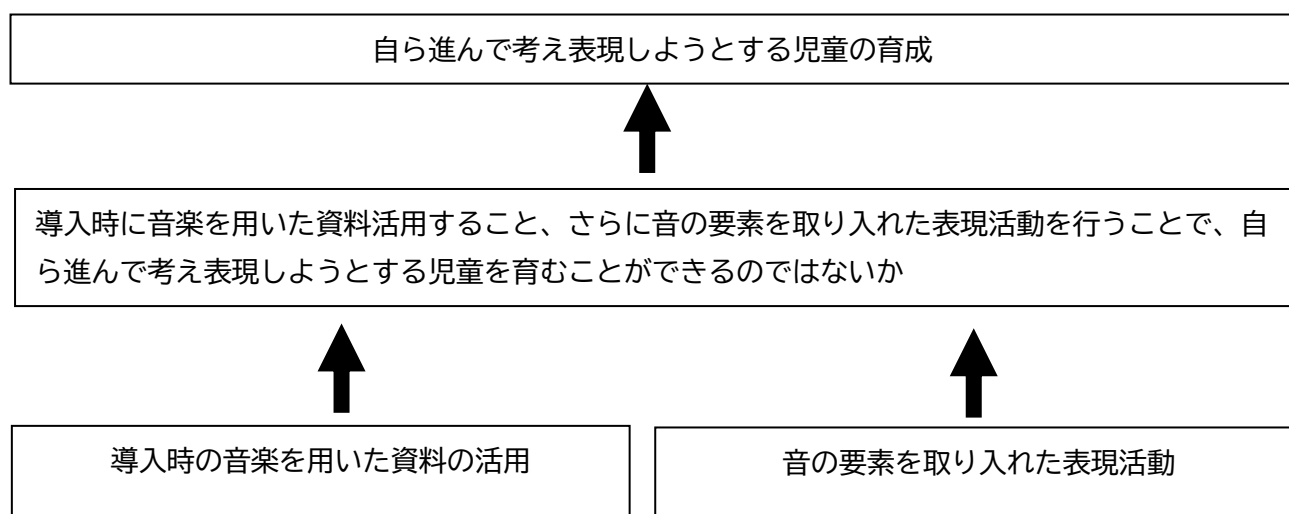
導時に使用した映像資料のうち何が児童の興味関心を惹きつけるのか。試しに消音にして流して一人で鑑賞したところ、映像自体の良さはあるものの、魅力自体は半減したように思えた。同じ映像を見ていた子どもたちも音があった方がイメージがわかりやすいと言っていた。そこで授業の展開によって音や音楽を使用することは効果的ではないか検討したい。

第2 研究仮説

本研究では音や音楽の要素を取り入れた表現活動を行うことで、自ら進んで考え表現しようとする児童の姿を実現できるのではないかと考えた。



研究構想図



第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 導入時における音や音楽の効果について

情報の伝達において視覚と聴覚の相互作用は非常に重要な役割を果たしている。1991 年の日本音響学会誌に掲載された岩宮眞一郎氏の論文「オーディオ・ヴィジュアル・メディアを通しての情報伝達における視覚と聴覚の相互作用に及ぼす音と映像の調和の影響」によれば、視覚と聴覚の相互作用には、共鳴現象と協合現象があるという。共鳴現象とは、明るい音が映像の印象を明るくするように、心理的性質（通様相性）を同じ方向に変化させる現象のことで、協合現象とは、音と映像が重畳することにより、視覚と聴覚が相乗的に作用して、作品がより印象的になるようなことである。この先行研究では、作者の意図を無視して、故意に調和しないような音と映像を組み合わせた刺激素材も併せて用い、音と映像の組み合わせの調和度が視覚と聴覚の相互作用に及ぼす影響を系統的に検証した。

実験の結果、協合的な相互作用に関しては、音と映像の調和度が高いものほど、その効果が大きいことが示され、「視覚と聴覚の協合的な相互作用は音と映像の調和を感知する。視覚情報と聴覚情報の統合過程からのフィードバックによってコントロールされたものであろう」との推論を確証するに至った。聴覚、視覚いずれの印象においても、調和度の高い音と映像を組み合わせることで、その評価が高まるのである。この結果は、一般によく言われている「画にマッチした音が画の効果を一段と高め、音にふさわしい画像が音の印象を更に高めるとの主張を裏づけるものである。

更に、調和のとれた音と映像の重畳が、「通様相性間でバランスをとろう」とする制作者の意図を視聴者に伝達するのに効果的に働く傾向も確認された。さらに一般的に視覚と聴覚の関係を語るとき、「視覚優位」と言われるが、共鳴現象においては、聴覚から視覚への方が、逆方向に比べて、明らかに優位であると結論付けられた。

このように先行研究から、音楽入りの映像資料には、①情報の強化②感情の喚起③記憶の定着④注意の分配の効果があることがわかった。音声や音楽が映像と組み合わせることで、メッセージが強化

され、視聴者の注意を引きやすくなる。音楽や音声のトーンは、視聴者の感情に直接影響を与えることができる。映像が持つメッセージに対して、適切な音加わること、視聴者の感情的な反応を引き出し、より強い印象を与えることができる。また、異なる感覚が同時に刺激されることから、脳が情報をより効果的に処理するため情報の記憶が促進される。さらに音と映像の調和が取れている場合、視聴者は情報に対してより集中しやすくなる。だが一方で、音と映像が不調和であると、注意が分散し、情報の理解が妨げられることがわかった。

(2) 音や音楽をきっかけにした表現活動について

音や音楽をきっかけとした表現活動はすでに行われており、先行資料からもその有用性が示唆されている。

八王子市立船田小学校の図工専科である橋田朋憲指導教諭が行った授業「音楽より絵へ」では、音楽専科の協力を得てピアノの生演奏を聴き、自分なりのイメージをもち、コンテの特徴を生かして絵に表す活動だった。演奏された「playing love」(作曲エンニオ・モリコーネ)は短いながらも抑揚がありさまざまなイメージを呼び出してくれる授業者のお気に入りの曲である。音楽を聴いてから描くまでの時間をなるべく減らすことで、児童のイメージや衝動や思いが新鮮なまま消したり足したり多様な表現につながっていくことから描画材はコンテ・パステル、支持体に木炭紙(54cm×54cm)が選ばれた。また、色を黒に限定して有彩色を使わないことで、形をより意識できるよう考えられた。題材の導入として、音字に至る前に全く別の曲を聴きながらイメージに変換するトレーニングを行ったという。以下が指導案の一部である。

○題材の目標(※)

ピアノの生演奏を聴いて自分なりのイメージをもち、コンテの特徴を生かして絵に表す。(形・イメージ)
詳しくはこちら→



A表現(1)イ(2)イ・B鑑賞(1)ア・共通事項(1)ア・イ 4時間

○題材観

「音楽より絵へ」は、絵に表す題材で、ピアノの生演奏を聴いて感じたことから思いをもち、コンテで絵に表す活動である。

絵や立体に関わらず、表したいと心から願う瞬間はどのような瞬間だろうか。僕自身はかつてバンドをしていた時に幾度かそれを感じたことがあった。自身が不安定で放埒に生きていた時期だったというのもあったが、その瞬間の直前には必ず心が動く風景や音、音楽、言葉、人などとの出会いがあった。表したいと子どもが願うように、呼び水になる「心が動く仕掛け」を教師の人生から抽出できたらみんなハッピーである。この題材では、そのイメージの呼び水をピアノの生演奏にした。「playing love」(作曲 エンニオ・モリコーネ)は短いながらも抑揚があり、様々なイメージを呼び出すことができ、大好きな曲でもある。そして生演奏の感動は子どもの心を動かし、自身の深い部分を表出させるエネルギーになるはずである。演奏は音楽科担当の荒木康恵主幹教諭にお願いした。地域のピアノ教室の先生や、地域在住のアーティストに協力を仰いだ年もあった。



描画材はコンテ・パステル、支持体に木炭紙(54×54)を選んだ。音楽を聞いてから描くまでの時間をなるべく減らすことで、児童の中のイメージや衝動や思いが新鮮なまま、消したり足したりする多様な表現につながっていくと考えたからである。また、有彩色を使わないことで、形をより意識できると考えた。描き方は想像の広がりに応じて児童に委ねたい。そして表現するものは具象抽象を問わず、自分の中に生まれた形やイメージとする。導入として、全く別の音楽を聴きながら聞いたことをイメージに変換するトレーニングを経て本時に望む。テクノやオルタナティブの名曲を聴いて、踊ったり、声を発したりしながら心を開放していく。コンテで手を動かしながら形を見つける子ども、はっきりとしたイメージをもって描き始める子ども、様々なベクトルで表していく。

この題材を通して、内から出てきた「自分の形」の素直さに気付いてほしい。一つの音楽、一つの描画材で始まる題材だが、一人ひとりが感じたままに表した形に、多様な美しさと思いを感じることができる。自他の良さを感じ取り、表すことに喜びを感じられることを願っている。

〈材料と用具〉

授業者：木炭紙・コンテ(黒・灰・白) / 児童：消しゴム・雑巾・敷物

〈関連する題材〉

●抽象的な表現についての題材

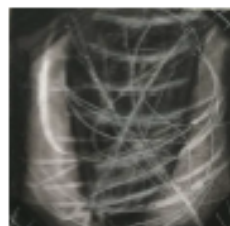
第6学年「Don't think feel」/アクリル絵の具で透明プラスチック段ボールに思いのままに描く。

●コンテ・パステルを使った題材

第6学年「時間をとめて」/自分の好きなものをデッサンして時間を止める。

○児童観

このクラスの子どもたちは、自分の思いを表すことに喜びを感じている子どもが多い一方で、友達の目が気になって思いっきり表現できない子どももいる。この題材では、没入してイメージをつかむために、個々を離して活動を行う。多様な表現を認め、共感することを基本としながらも指導・助言を必要とする児童には適切なアドバイスをしていく必要がある。児童それぞれの感じた形やイメージを思い思いの表現に結びつけていくよう指導をし、個々のゴールに到達させていく。



○評価のポイント

- ・音楽を聴いた感じから、自分のイメージをもち、発想や構想をしている。【思考・判断・表現】
- ・表したいことに合わせてコンテ・パステルの特徴を生かしている。【技能】

○本時の流れ

- ・本時の目標

曲を聞いた感じから自分なりのイメージをもち、コンテの特徴を生かしながら絵に表す。



時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準(評価方法)
導入	・本時のねらいを把握する。 ・学習の進め方を知り、学習の見通しをもつ。		
5分	音楽を聞いて感じたことや想像したことをコンテで絵に表そう。 ●木炭紙にコンテ・パステルで描きます。自分の中に広がったイメージに合わせて描き方も決めてください。	・音楽を聞いて、感じたことや膨らんだ想像の世界を描くことを強調する。(ピアノを弾いている人を描くのではない)	
展開 45分	・「playing love」を聞く。 ・コンテ・パステルで音から感じたことを絵に表す。 最後の10分 ・もう一回演奏を聴き、自分が描こうとしていることを見つめ直す。	・演奏が終わったらすぐに絵を描く。 ・何を描こうか決めかねている児童には、授業者との会話の中でイメージを膨らませる 「どんな気持ちになった？」 「音楽の中に早い部分と遅い部分があったね。どちらが気に入った？」 「音楽を聴いたときの気持ちと同じ気持ちになったことはある？」 「この音楽はどんな気持ちを表しているのだろうか？」 「…(支援は必要ない。見守る。)」 ・再度演奏を聴いて、感じ方が変わった場合、絵が変わっていくのもよいことを伝える。	・演奏を聞き、想像を膨らませようとしている。(活動の様子を観察) ・作曲から感じたこと、想像したこと、自分なりの表現をしている。(作品)
掃除 まとめ 10分	・掃除をする。 ・本時の学習内容について振り返る。	・コンテのくずがたくさん落ちていることが予想されるので、濡れたぞうきんでふく。 ・まとめは「自分がどういった想像をしたか。」という点を発表させ、多様な表現(形)が生まれていることを認識させる。	

また岡田京子氏編著の「図工科授業サポートBOOKS 指導計画から授業展開までよくわかる！ 小学校新学習指導要領 図画工作科 題材&授業プラン」でも、高学年の題材「おと・いろ・かたち」で音楽を取り入れた授業を紹介している。



3 題材の全体計画 (全2時間)			
時間	学習活動	☆子供の様子	○留意点 評価の観点
1次 (30分)	音を、色と形で表そう。 ☆トライアングルの音を開く 「どんな色？どんな形？」 聞いた音を、色と形で表そう。 ☆楽器の音のイメージに合わせて、 材料の組み合わせや使い方を工夫 して形や色で表してみる。 ☆観察	○一人一人がイメージをもてるよう音をじっくり聞かせる。 □【主体的に学習に取り組む態度】指導に生かす評価 ○用具を音に合わせて選択できるようにする。 ○同じ音でもそれぞれの思いによって多様な表現ができることを知る。 □【知識・技能】【思考・判断・表現】指導に生かす評価	
2次 (60分)	自分の表したい音を、色と形で表そう。 ☆学校の中で聞いた音の中から、自分の心に残る音を見付けよう。 ☆自分で考えた音のイメージに合う形や色、材料や構成の美しさを生かし表してみる。 ☆観察	○自分の表したい音をワークシートに書き、思いを大切に活動できるようにする。 □【思考・判断・表現】記録に残す評価 ○自分や友達を表した形や色などの、よさや美しさを話し取り、生かして表す。 □【知識・技能】記録に残す評価 □【主体的に学習に取り組む態度】記録に残す評価 ○音のイメージに合った形や色になったか、互いの表現のよさや美しさを感じたか。	

この題材は音をきっかけに新たな見方や考え方を獲得し、価値をつくりだす題材である。1次でトライアングルの音を色と形で表してみ、それから楽器の音のイメージに合わせて材料の組み合わせや使い方を工夫して形や色で表す。2次で学校で聞いた音の中から、自分の心に残る音を見付け、自分で考えた音のイメージに合う形や色、材料や構成の美しさを活かし表す。音から感じたことを思考し深められるよう展開を2つに分けている。展開1では、音を聞いて表し方を考え材料や用具を試し、形や色で表せることを知る。また、友だちの表現で同じ音から生まれる表現の多様さを味わい、見方や感じ方を広げる。展開2では、自分の表したい音を見付けワークシートに言語化することで、自らの思いを大切に、構成の美しさを活かした絵に表す。最後に互いの作品の鑑賞を通して、音から感じ取った思いや表現の意図を考え、表した形や色などの美しさを価値のあるものとして捉え、豊かな人間性を育てる題材となっている。授業者によれば「実際に授業を行ってみると、私たち大人が思っている以上に生活の中で子どもたちは音を身近に感じていて、聞いた時の思いをのせながら、形や色で表せる面白い材料だということを再認識することになった。指導を終えて、材料としての音は、子どもが思考して思いを深め、表現する可能性のあるもので、これからは特別でなく当たり前扱われる材料になるだろう」と述べている。

これらのことから、音や音楽を聞き平面作品に表現する活動はすでに実践され、有効性も確認できているといえるだろう。導入時に音楽を入れた視覚資料を使用することで、さらに立体作品についても自分の心に残る音を見付け、進んで表現しようとする児童の育成が行えるのではないかと考えた。

2 調査研究

先行資料において音楽入り視覚資料が有効であるとわかったが、実際に期待する効果が得られるのか検証するため、導入時にBGMとして音楽を入れた映像資料を使用した授業を行った。以下が指導略案である。

図画工作科学習指導案（略案）

日時 令和6年6月22日（土）第3, 4校時
 対象 5年1組 26名
 場所 図工室
 授業者 水野 豊

1 題材名 「オモイタネ」

2 本時の目標

- 生命の石からどんな形が生まれるのかイメージしてつくる。

3 本時（3/3時）

展開

時間	学習活動	◆指導上の留意点	☆評価【方法】
導入	① 前時までに作っておいた生命の石と素焼きの土台を確認する。	◆取り間違えることが無いよう留意する。	
	② 本時のめあてについて確認する。		
	③ 映像資料で本時の活動や注意点を確認する。	◆音入りの映像資料と音無し の映像資料を用意する。	☆主【映像資料を見ているか】
生命の石からどんな形が生まれるかイメージしてつこう。			
展開	④ 土台に針金を取り付ける。	◆机間巡視の際に、土台に針金をつけるのが難しい児童には支援する。	
	⑤ 針金の形を変えて自分らしい表現を模索する。	◆安全に針金を使えているか確認する。	☆知【針金を適切に使用できているか】
	⑥ 友だちの作品を見合って参考に する。	◆全員手を止めて互いの作品 を見合う時間を設ける。	☆思【自ら表現しよう としているか】
	⑦ 作品を仕上げる。		
まとめ	⑧ 友だちの作品を鑑賞する。	◆面白いところや工夫したところ、 良いところを探すように伝える。	☆思【マナーを守って 鑑賞できるか】
	⑨ 片づける。		

☆評価 知【知識・技能】、思【思考・判断・表現】、主【主体的に学習に取り組む態度】

授業後にとったアンケートの結果が以下の通りである。（21 人回答）

質問の内容	とても そう 思う	だいたい そう 思う	あまりそう 思わない	そう 思わ ない	わか らな い
(1) 今日の授業はむずかしかったですか？※本時についての質問をした。	5 (23.5%)	6 (28.6%)	8 (38.1%)	2 (9.5%)	0 (0.0%)
(2) テレビの資料はわかりやすかったですか？	9 (42.9%)	12 (57.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
(3) テレビの資料はつくりたいものを考えるのに役立ちましたか？	12 (57.1%)	7 (33.3%)	2 (9.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
質問の内容	音楽あり		音楽なし		わか らな い
(4) テレビの資料は「音楽あり」と「音楽なし」ではどちらのほうがよいですか？	15 (71.4%)		1 (4.8%)		5 (23.8%)
(5) 4 問目の質問でその答えを選んだ理由は何ですか？	◎音楽ありの方が集中して見れる ◎わかりやすいし楽しくできるからです ◎とてもわかりやすかったから。 ◎音で聞いたほうがわかりやすい ◎音楽があったほうが作業が楽しくなって、いろいろなアイデアがたくさんうかんだ！ ◎音があったほうが、やりやすかった。 ◎おちつくから ◎音楽ありの方が見ていて楽しい!!（見てて飽きない） ◎聞きやすい ◎わかりやすいからです ◎たのしくなる ◎音楽がある方が、「見たい」という気持ちが増すと思うから。 ◎なんとなく △音楽があっても変わらないから △音は音楽だったのでどうでもよかった △どっちもあってほしいから △楽しくできてるから △なしのほうがいいから ×あってもなくてもかわらない				

質問2の回答から制作の手順や注意点を入れた映像資料を導入時に使用することは有効であるとわかった。質問3からも概ね児童の発想の手助けになっていることがうかがえる。ただ、今回の映像資料には、本来児童が活動の中で自ら気付いてクラス全員に広まるべきアイデアなどの情報も含まれており、

過度に上げすぎないように配慮が必要だとわかった。

質問4の音楽の有無では、音楽を入れた映像資料とそうでないものを2パターン用意した。導入時の全体指導では大きなモニターに音楽ありの資料を映し、制作活動が始まる際に児童の学習用端末から音楽無しの資料も見られるので確認してから制作するよう伝えた。挿入した音楽は過度に刺激の強いものではなく、明るめの穏やかな楽曲にしたかったので、検討の結果、無料の音楽素材提供サイト甘茶の音楽工房より「日々是好日」を選んだ。

また、音楽無しの映像資料は活動中に何度も見返せるようにしておいた。アンケートの結果では、7割以上の児童が音楽ありの映像資料のほうが良いと回答した。このことから導入時の映像資料に音楽を入れることは有効であると考えた。今回は音楽と映像の調和が取れていことを意識して選曲したが、より理解と記憶に効果的な音楽はまだ探し切れていないので、これからも検証する必要がある。

3 授業研究

仮説の効果を検証するため、令和6年12月3日（火）に授業を行った。

ア 実践の概要

図画工作科学習指導案

日 時 令和6年 12月3日（火）
第5校時 13：30～14：15
学校名 八王子市立中野北小学校
対 象 第5学年1組 22名
会 場 図画工作室
授業者 主任教諭 水野 豊

1 題材名 「音のかたち」 A表現（1）イ（2）イ B鑑賞（1）ア 共通事項（1）ア、イ

2 題材の目標

（1）「知識及び技能」に関する目標

- ・ 自分の感覚や行為を通して陶芸粘土がつくりだす形や色などの造形的な特徴を理解する。
- ・ 表現方法に応じて用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、表したいことを基に表し方を工夫して表す。

（2）「思考力、判断力、表現力等」に関する目標

- ・ 音を立体に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たこと、伝え合いたいことから、表したいことを見付けることや、形、材料の特徴、構成の美しさなどの感じなどを考えながら、どのよう

に主題を表すかについて考える。

- ・ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつ

(3) 「学びに向かう力、人間性等」に関する目標

- ・ 主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

3 題材の評価規準

知識・技能（ア）	思考・判断・表現力（イ）	主体的に学習に取り組む態度（ウ）
① 自分の感覚や行為を通して陶芸粘土がつくりだす形や色などの造形的な特徴を理解している。 ② 活動に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具についての経験や技能を総合的に生かしたり、方法を組み合わせたりするなどして、表したいことを基に表し方を工夫して表している。	① 自分で選んだ音を基に、自分のイメージをもちながら、表したいことを見つけ、どのように表すか考えている。 ② 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、親しみのある作品などから自分の見方や感じ方を深めたりしている	① つくりだす喜びを味わいながら、粘土を用いて音のイメージを立体で表現することに粘り強く取り組もうとしている。 ② 自分たちの作品について造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めようとしている。

4 指導観

(1) 題材観

本題材は、小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）第 2 章 第 7 節 図画工作 第 2 各学年の目標及び内容を受けて設定した。

〔第5学年及び第6学年〕 2 内容

A 表現

- (1) 表現の活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、感じたこと、想像したこと、見たこと、伝え合いたいことから、表したいことを見付けることや、形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、どのように主題を表すかについて考えること。
- (2) 表現の活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
イ 絵や立体、工作に表す活動を通して、表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに、前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり、表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと。

B 鑑賞

- (1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めること

〔共通事項〕

- (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。
イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。

本題材は、粘土を用いて、実際に日常生活で一人ひとりが見つめてきた音から発想を広げ、立体に表現していくものである。これまでも音や音楽聞いて感じたイメージを絵や模様などの平面で表現するという授業は行われてきた。ただ、目に見えない音の形や色を表現する際に、立体の製作は難しかった。そこで、活動の経験が十分にあり、可塑性のある陶芸用の粘土を用い、表現を形に限定することで、想像のしやすさや元に戻すことの容易さから、どの児童も取り組める活動になるのではないかと考えた。指導にあたっては、第1時に教師が用意した音を聞かせて、オノマトペに変換させ、それから絵で表現する活動を行った。目に見えない音から平面での色や形を考える経験を積むことで、立体表現としての製作のイメージをよりもたせやすいのではと考えた。

(2) 児童観

本学年の児童は、説明を静かに聞くことができるなどの基本的な学習規律を課題にしているが、図画工作に苦手意識をもつ児童は少ない。どの課題に対しても概ね意欲的に取り組む児童が多いが、表したいものを豊かに発想したり、自由に表現したりすることが苦手で手が止まってしまう児童が多いように感じる。例えば、作品をつくる際、手順を示す演示でできあがった簡単な構造のものの形を発展させずにそのまま真似したり、材料や色の組み合わせがほとんどない状態で完成させたりする様子が見られる。また、そうして一応の形が一つ出来上がるとそこで満足してしまい、粘り強くより深めようとはしない。

これまでの学習で粘土を扱う学習を積み重ねてきている。ガラスを入れた焼き物や素焼きなど低学年

の頃から粘土を切ったり掻き出したりして成形した経験をしてきているため、可塑性のある材料の扱いには慣れ親しんでいると思われる。そこで、今までに学んだ粘土の経験に音を立体に表すという新たに要素を加え、工夫の幅や表したいもののイメージを今まで以上に広げることができるのではないかと考えた。表したいイメージをどんどん試していくことができる本題材を通して、造形的なよさや面白さを感じ取ったり考えたりし、それを基に発想を豊かに広げてどのように表すかを考えられる児童を育てたい。

(3) 教材観

可塑性のある粘土は表したいものを表すのに適した材料の一つといえる。活動の前に表したいことが見つからなくても、材料に触れながら、形、粘土の特徴、構成の美しさなどの感じなどを考えることで、表したいことが見つかる児童の実態もある。また本題材の主となる活動は、素焼き前のため絵の具や釉薬などの色塗りは行わない。そのため形だけに焦点を絞り考えることができる。大小さまざまな粘土の塊を用意することで自分の必要とする量を選び使うことができるようにしておいた。

活動中は学習用端末を1人1台持たせ、専用のヘッドホンを使用して、いつでも自分の選んだ音を聴き直せるようにしておく。また一度平面で考えたい児童のために紙も用意しておくことにした。

5 「音のかたち」に関わる既習事項

- ・(1・2年) 油粘土による造形遊び 『ねんどであそぼう』『にぎにぎ ねん土』
- ・(2・3・4年) 紙粘土による工作 『おもいでをかたちに』『ねん土マイタウン』『天空タワー』
- ・(2・5年) 陶芸粘土による作品制作 『いいゆだな』『オモイタネ』

6 指導と評価の計画 (5時間)

時間	ねらい・学習活動	評価の観点、指導方法など				備考
		知	技	思	態	
		知識	技能	発想や 構想	鑑賞	
1	・音を聞き、イメージをふくらませる。	◎ 観察 対話 作品 ワークシート		◎ 観察 対話 作品 ワークシート		1、2時間目は「知識」と「思考・判断・表現（発想や構想）」の視点で児童の学習状況を把握し、指導に活かす。
2	・鉛筆や絵具、クレヨン、パステルなど今まで学習した方法で平面の表現をする。 ・自分や友だちが表現した途中経過の作品を互いに鑑賞し合い、発想をふくらませる。 ・鑑賞して気付いたこと、参考になったことを踏まえて自分の作品をよりよくする。 ・自分と友だちの仕上がった作品を鑑賞する。					
3 本時	・陶芸用粘土で学習した方法を使い立体の表現をする。		◎ 観察 対話 作品	◎ 観察 対話 作品 ワークシート		3、4時間目を通して、「知識・技能」、「思考・判断・表現（発想や構想）」の視点で児童の学習状況を把握し、記録に残す。
4 本時	・自分や友だちが表現した途中経過の作品を互いに鑑賞し合い、発想をふくらませる。 ・鑑賞して気付いたこと、参考になったことを踏まえて自分の作品をよりよくする。 ・自分と友だちの仕上がった作品を鑑賞する。					
5	・焼成された自分や友だちの作品を鑑賞する。				◎ 観察 対話 作品 ワークシート	5時間目は「思考・判断・表現（鑑賞）」の視点で児童の学習状況を把握し、記録に残す。

○…題材の評価規準に照らして、適宜、児童の学習状況を把握し指導に活かす。

◎…題材の評価規準に照らして、全員の学習状況を把握し記録に残す。

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・手びねりや板づくり、ひもづくりなど陶芸用粘土の特徴を生かし、表したい形をつくる。
- ・自分で選んだ音の感じを基に、自分のイメージをもちながら、表したいことを見つけ、どのように立体に表すか考える。

(2) 本時の展開 (3・4時間目 90 分／全5時間)

	○学習内容 ・学習活動	●指導上の留意点	☆評価観点
導入 10 分	○前時を振り返る。 ○本時の学習内容を確認する。 ・用具や材料を準備する。	●演示を最低限にし、発想が教師の見本に引っ張られてしまわないよう留意する。 ●乾燥後に焼成すること、それが可能な形に表すことを伝えておく。 ●大小さまざまな粘土の塊を用意することで、児童が自分の必要とする量を選び使うことができるようにしておく。	
探してきた音のイメージを立体で表そう			
展開 70 分	○陶芸用粘土で学習した方法を使い立体の表現をする。 ○自分や友だちが表現した途中経過の作品を互いに鑑賞し合い、発想をふくらませる。 ○鑑賞して気付いたこと、参考になったことを踏まえて自分の作品をよりよくする。	●発想が難しい児童にはオノマトペを考えたり、平面で表現してから取り組むよう助言する。 ●机間巡視の際に手本として見せたい児童の表現をいくつか選んでおく。 ●全員活動を止めさせ、遠くの席の友だちの表現も鑑賞できるよう機会をしっかりと設ける。 ●そのまま活用してつくりかえても良いし、新しくつくってもよいと伝える。試しの時間と本番の時間、というように分断せず、流れるように活動が進められるよう言葉かけに留意する。	☆自分で選んだ音を基に、自分のイメージをもちながら、表したいことを見つけ、どのように表すか考えている。イ - ① ☆手びねりや板づくりなど陶芸用の特徴を生かし形について考えることができる。イ - ②
終末 10 分	○自分と友だちの仕上がった作品を鑑賞する。 ○本時の活動を振り返り、次回の活動について知る。 ・材料や用具の片付けを行う。	●一人ひとり作品の横に学習用端末を置き、どんな音かわかるようにする。 ●見通しが持てるように、次回の流れを伝える。	

(3) 材料・用具

〈児童〉汚れても良い服、タブレット、筆箱

〈教師〉陶芸粘土（1 kg、3 kg、2 kg、1 kg）、のし棒、へら、プリンカップやキャップなどの型
糸、粘土板、描画材、紙、ぞうきん、ビニール袋

(4) 板書計画

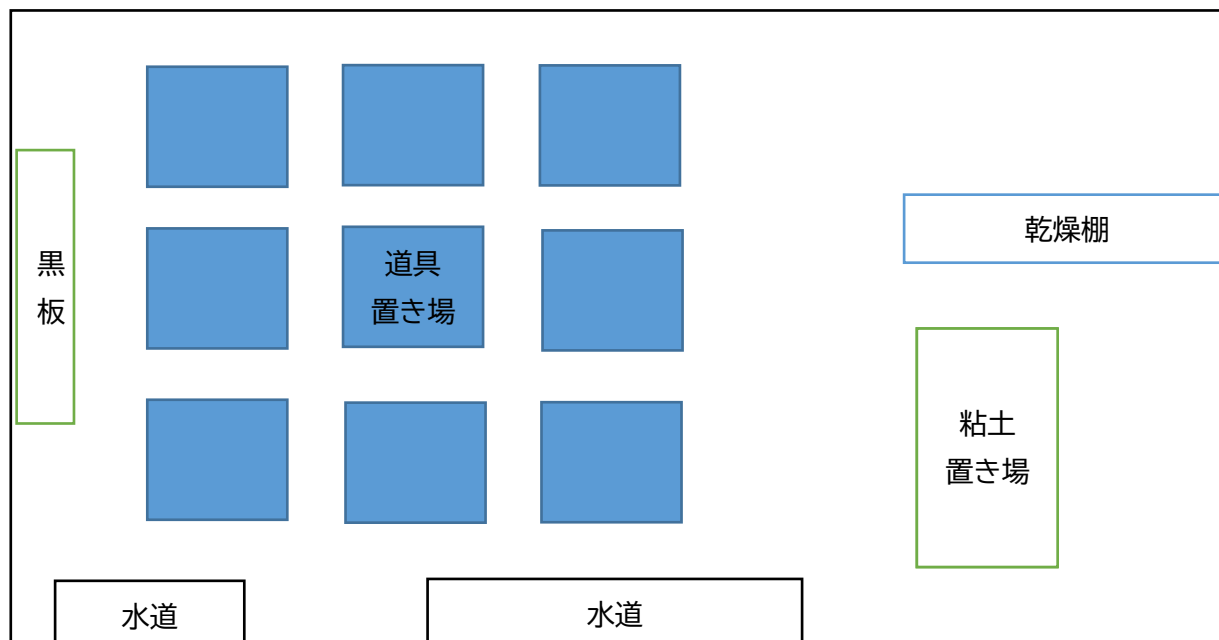
「気になる音から」

(めあて) 探してきた音のイメージを立体で表そう

- ①自分のえらんだ音をかくにんする。
- ②粘土や材料をとってくる。
- ③音を立体であらわす①
- ④みるみるタイム
- ⑤音を立体であらわす②
- ⑥かんしょうタイム
- ⑦かたづけ・あいさつ

(5) 学習環境

教室中央に用具をとるスペースをつくり、作品をつくりながらも鑑賞が自然に行える配置にする。また、大きい粘土の切り分けは他の児童の活動の邪魔にならないよう教室後方にした。図工室外にも音を確認できる場所を設けることで、周囲の音や待ち時間を気にすることなくどんどん聞けるようにする。



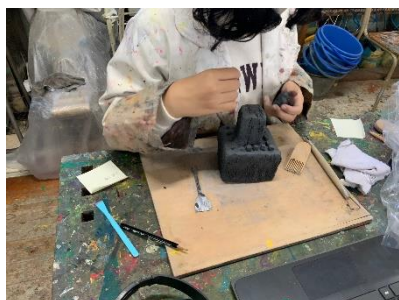
(6) 授業観察の視点

- ・音を立体に表現する活動において、陶芸用粘土は適切だったか。
- ・発想することが困難な児童の手だてとしてオノマトペや平面表現を利用できるようにすることは有効だったか。

イ 考察

授業後に行ったアンケートの結果では「十分活動ができた」と回答した児童が 36.8%、「まあまあ活動できた」と回答した児童が 63.2%で「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童はいなかった。「活動できた」と自己評価している児童は 100%だった。しかし、本時の導入から初期の段階では音のイメージを立体で表現するという本時のねらいを意識して活動する児童は少なく、取ってきた粘土をちぎったり叩いたり積んだりしながら発想してつくりたいものをつくっている姿が見られた。そこで第4時の冒頭でもう一度めあてを確認し、自分の探してきた音を意識させて取り組ませた。これは陶芸用粘土がこちらが考えていた以上に児童にとって魅力的な材料であり、つくりたいものを思い通りに成形できるというこれまでの経験が影響したのだと考えられる。

一方で本時の始めからねらいを意識して活動している児童の中には、鉛筆でイメージを紙に描いてから立体で表現する姿も見られ、授業後の聞き取りからも、アイデアを描くための紙を用意したことは手立てとして有効であることがわかった。録音した音をすぐ聞き返せるようクロームブックを用意したことも、何度も聞き返して活動しているようすから十分に活用はできていた。さらに、音が漏れないようヘッドホンを用意したことも有効だったと考えられる。また、オノマトペを口ずさみながら活動したり、友だちの書いた付箋を見ながら鑑賞する姿も見られた。このことから、オマトペを付箋に書かせて注目させたことは、より手軽に音に意識を立ち返らせることができ有効だった。



第4 研究の成果

先行研究を調査したり自ら実践する中で、音や音楽は児童のイメージをもたせることに有効であることがわかった。また、導入時の映像資料に音楽を入れることもねらいや学習内容の理解を深め、イメージをもたせることに効果的であるとわかった。また、音楽と映像の調和が取れていると、より児童の理解を深めイメージをもたせることができるが、その反対に調和がとれていない場合は期待するほどの結果は出せず、むしろ逆効果につながることもわかった。

検証授業の結果から音を立体で表現する活動で陶芸用粘土が有効であることが確認できた。また、音や音楽のイメージをもたせる手立てとして一度平面で表してみること、録音した音をいつでも聞けるようにしておくこと、オノマトペを使うことも有効であるとわかった。

第5 今後の課題

前述の通り、検証授業の結果から音を立体で表現する活動で陶芸用粘土が有効であることがわかった。ただし、粘土自体の魅力が高いため、しっかりと本時のねらいをおさえてから取り組む必要があることも分かった。また、教師が取り上げて全体に伝えたい作品を机間指導の際に確認しておいたが、いざその時になると、形が変わっていてその表現がなくなってしまっている場面もあった。これは、作り

変えやすい粘土の特性によるものなので、心づもりが必要だった。事前に写真に残しておくか、あるいは児童が残したいと思えるよう作品の価値付けをするとよいかもしれない。

事前の授業では音のイメージを平面で表現してから本時の活動に入ったが、色の要素がなくなったので、困惑する児童が数名いた。事前授業の描画材を鉛筆などに限定してもよかったのではないか。また、全て教師側が用意した楽器の音だったため、児童の選んだ音も能動的に起こしたものに限定されてしまった。より丁寧な資料の提出の仕方及び厳選が必要であるとわかった。

以上の課題に加えて、場の設定や端末の集音の性能についても今後も検討の余地がある。今後も改善をしていきたい。

第6 引用文献

- 1 文部科学省 「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 図画工作編」, 2018
- 2 岩宮眞一郎 「オーディオ・ヴィジュアル・メディアを通しての情報伝達における視覚と聴覚の相互作用に及ぼす音と映像の調和の影響」日本音響学会誌, 1991
- 3 橋田朋憲 「音楽より絵へ」指導教諭師範授業より , 2022
- 4 岡田京子 「図工科授業サポートBOOKS指導計画から授業展開までよくわかる！小学校新学習指導要領 図画工作科 題材&授業プラン」, 2020